息づく倫理学の伝統

愛媛の一漁村長浜を出て、文理大へ入ったのは昭和24年。やがて研究科へ進み、のち比治山学園に就職した。大学時代からの恩師、現大東文化大学長池田末利先生の学恩は尊いが、比治山の学園長国信玉三先生から受けた教育道の恩愛もはかり知れない。

研究科へ進んだ学友の山根三芳・木場猛・小西国夫（故人）の三君は、高校教師などを経て、それぞれ高知大・長崎大・岡山大に教授として勤め倫理学を講義、広島大には一年先輩の河野真学兄がおられる。西晋一郎先生以来の広島倫理学は、私の周辺だけでも、なお西日本の各大学で脈々と息吹いている。

私は研究科を経て比治山学園に勤めたが、ここに短大を建設するのも私の一つの仕事であった。ところで30年代後半は、大学新設のラッシュ期であったが、「大学を創ろうとすれば、激務のため死者が出る」といわれた時代に、大学を建設するのは難事であった。私も例外ではなく、設置認可ののち病魔に倒れたが、幸い名医岡田泰二先生のお蔭で、半年足らずの入院で快癒した。

名医といえば、県病院の大城久司先生もそのお一人。私は先年、乳下に鈍痛があり、それが悪性ではなかろうかと心配してみて頂いた。しかし、それは患部を切り取って検査してみなければわからない、というので切開した。結果は見立て通りで、乳腺に脂肪がつまっていただけであった。ところが、ここで、何ともくすぐったい体験をした。痛む箇所が乳ということと、名前がむつみという女性にも通ずるためか、さてどこでどう間違ったか、手術に当って、私は数名の女性患者と一室に入れられてしまった。手術はたとえ小さなものでも厳粛で、着てい

た衣類を脱ぎ、緑のガウンと三角巾でからだを包む。こうなれば男か女か見分けがつかないはずだが、所詮は男性である。感づかれて私は小さくなっていた。

これと多少は違うが、古本屋の小僧になりすまして、神田の古書市に紛れ込んだ折も正体はすぐにばれてしまった。短大新設に必要な図書購入には、学生時代からの知友、南海堂店主の中村稔氏の協力を得ていた。かの古書市は業者対象のもので、素人は入れないのに、彼は私に上っ張りを着せて店員に仕立て、会場に入れてくれた。お蔭で一誠堂や彙文堂などの有名古書店にも負けない大きな買い物ができた。全国から集った業者の方々も、この闖入者の古書買いを、寧ろ、ほほえましそうな目で容認してくれていた。

昭和27年頃の後藤先生並びに学友と

柳盛社印刷所の社長長浜弥市氏も、短大設置に協力してくれた一人だが、彼は恩師後藤俊瑞先生の『朱子索引』印刷以来の知友だから、もう三十年来の付き合いとなる。先年、比治山学園に事務所を置いて刊行した『池田末利博士古稀記念論文集』も積極的に協力してくれた。まさに持つべきは友である。

いよいよ私も熟年。自らが天職と信ずる女子教育の道を、師友のご教示に感謝しながら、今後も精進していきたいと思っている。

中国新聞（夕刊）「交友録」（昭・58・1・22）